

## 「心の起源」

木下清一郎著

木下清一郎著

### 心の起源

生物学からの探求

中公新書  
1659

仕事から、知的障害者という時間が多く、心のしくみは気になっていた。それは彼らが非常にストレートに、こちらが予想していなかった心の世界を示してくれ、それをききかけに、今までもっていた人間に対する考え方が、より深まることかたがたびあったからだ。著者は、そんな心の原点を「生命が記憶を持ってしまったこと」におき、それを機能させる上で神経系の重要さを論じている。

生物は、かならず外界と自己との間を区切って自分の環境を不変に保とうとする（ホメオスタシス）。これは、神経系だけでなく免疫系、内分泌系ともにそなわる力だ。しかし、外界におこった変化を経験してたくわえ、将来にそなえる能力は内分泌系にはない。さらに、経験をくみあわせ、まったく未知のものに積極的にはたらく力となると免疫系にもなく、神経系だけが残ってしまう。

神経系にはもう一つ特異な点がある。外界

## 神経の「記憶」で読み解く

からの情報は、必ず記号にかえられることで受容される。そのとき使われる記号が、化学的信号や細胞反応だけではなく、電気的信号までもっている点だ。それにより他と比較にならぬ多くの情報の蓄積と素早い照合が可能となった。習いごとで、反復練習をしていると、あるとき、それまでの努力が嘘のようにやれるようになるのは、記号化がうまくいった証拠なのだ。

生命は、たまたま地球に水があったため、独自の四種類の配列（「個性」）をもった高分子が登場したことから始まる。個性はそれぞれに「個」を守ろうとせめぎあい、自身の手で自身と同一の分子をつくっていく。遺伝子はこうして形成されていくことになる。

そういえば、今は亡き、かつて出会った自閉症の青年も、こだわりやコミュニケーションの面で、実に神経系が個性豊かに形づくられていたように思える。ときとして「個」の世界を保持するため、頭につめこまれた情報を広告用紙の裏にぎっしり書き込む姿は、自らのDNAの痕跡をたんとんと残しているかに見えた。本書は、そんな体験を実感をもつて思い出させてくれた。

評・宮本誠一（小規模作業所「夢屋」代表）

◇きのした・せいいちろう 1925年大阪府生まれ。埼玉医科大学医学部教授、東京大学名誉教授。著書に「生命からのメッセージ」など。